

## 身近な神奈川古代史の発見

—横浜の古代を起点として—

光陵高校 須藤智夫

### 一 はじめに

「神奈川には古代史がない」というイメージが根強く存在しているように、現代の当地域との接点が見出しにくい古代史をいかに学ぶべきであろうか。この問題を解決するためには学ぶためのきっかけとして、自己との関連性を感じることが必要であろう。そこで、自分が何気なく暮らしている地域にも古代史が展開していたことを、断片的な資料であっても見つけ直してみることが必要となる。これよりいくつかの実践例に基づき、地名・人名、そして考古資料などに注目して、この問題についての考察を深めてみたい。

### 二 地元の古代史の発見〔古代地名・人名の例示〕

報告者は二〇〇八年八月に開催された『光陵セミナー』と称する生涯学習の講座において、「横浜から見える日本の古代史」と題して、身近に感じられる古代史〔古墳時代中心〕に関する授業実践を試みた。古代史といえば、『古事記』、『日本書紀』といった基本史料の講読から古代を考えることが重視されるが、一般の人々にこれを読み解いてもらうことになると、準備作業に相当な時間が必要となり、難解な古典のイメージまで重なる、敬遠されがちになると思われる。そこで、一般の人々や高校生が、気軽に簡単に古代を感じることができないか、ということを考えてみると、地名や人名に注目する方法が思い浮かぶ。それでは光陵高校の近郊や、横浜地域で

は古代との関連を語れる地名や人名は確認できるのであるか。

『日本書紀』安閑天皇元年条を紐解くと、武蔵国造の地位をめぐる地位争いを確認することができる。この問題を倭の王権が解決させると、その見返りとして、国造より四ヶ所のミヤケが献上された。すなわち、「横渟」、「橋花」、「多氷」、「倉櫟」のミヤケがそれである。また、『先代旧事本紀』の「国造本紀」によると、武蔵国領域の国造としては、「无邪志」国造、「胸刺」国造、「知知夫」国造の、相模国領域の国造としては「相武」国造、「師長」国造の名前を知ることができる。ここに六世紀代にまで遡る可能性のある古代地名を確認することができるのである。以上が、文献史料により推測できる律令制以前の地名である。律令制下の地名となると、『六国史』などによって断片的に知ることができるが、一〇世紀前半になると『和名類聚抄』から古代の行政区画の名称を体系的に知ることができる。そして、これらが律令制成立当初まで遡れるかどうかが問題となるのである。

さて、現在の横浜市域は武蔵国「久良」郡・同「都筑」郡・同「橘樹」郡の一部と相模国「鎌倉」郡の一部からなっていたと考えられるが、この地域の郷名では次のものが注目される。

久良郡星川郷 現在の保土ヶ谷区星川町と考えられる。この郷内と思われる保土ヶ谷区役所東側の川辺町付近には、近世の段階で「柳坪」の地名があったと推測され、条里制の「坪」との関連性を指摘することができる。

久良郡諸岡郷 現在の港北区師岡町と考えられる。飛鳥時代の迎賓館と考えられている奈良県石神遺跡より、七世紀末の史料と思われる「諸岡五十戸」木簡が発見され

ており、「諸岡」の地名がこの時点まで遡ることが判明している。他の郷名についてもこの時期まで遡るものがかなり存在していたと思われる。

都筑郡針斫郷Ⅱ現在の緑区西八朔町・北八朔町がこの遺称地であると思われる。

都筑郡幡屋郷Ⅱ現在の旭区さちが丘に「半ヶ谷」の地名が残り、鎌倉時代には「榛谷」氏が活躍していたと思われる。

この「榛谷」こそ「幡屋」の遺称と考えられ、「半ヶ谷」付近が古代の幡屋郷であった可能性は高い。また、旭区さちが丘の西隣は旭区「善部」町であるが、この「善」の字は元来は「膳」であったと思われる。そのように想定すると、この地域は元々は「膳部」と表記されていた可能性が高く、これは、倭王権に食膳を以って、奉仕していた膳部氏の分布・活躍を示すことになる。

橋樹郡高田郷Ⅱ橋樹郡は現在の川崎市域に相当すると考えられるが、このうちの高田郷については、西に隣接する横浜市域に港北区高田町があり、こちらを遺称地と推測することができる。

このように、古代地名と現代地名を関連付けることのできるケースをいくつか指摘できるが、かかる事実を認識して、現地を訪れることにより、古代史を体感するイメージができると思われる。

次に、人名について注目してみると、現代の名字に古代から伝わっているものは確認できないだろうか。例えば、現代の「○部」、「○部」などと「部」のつく姓は、古代の部民制との関連を想定する

ことができる。すなわち、「服部」、「軽部」、「磯部」、「曾我部」などがこれに該当しよう。横浜付近においては、これに関連した古代人名を知ることができるのであろうか。『続日本紀』、『万葉集』などを確認すると、わずかな例であるが、手掛かりをえることができる。次にこれを郡別に指摘しよう。

久良郡Ⅱ『続日本紀』神護景雲二年（七六八）六月二一日条によると、「飛鳥部吉志五百国」が橋樹郡からこの地に来て白雉を捕らえ、これを中央政府に祥瑞として献上したという記録が残されている。飛鳥部については橋樹郡の項を参照。

都筑郡Ⅱ『万葉集』巻二十には、天平年間に防人として徴発された「服部於田」とその妻「服部皆女」の歌を載せている。この氏名は機織を職務とする服部にちなむものである。服部は東国では武蔵・安房・美濃・越前・佐渡などに分布するが、全国的に設定されたと考えられる。この郡では「立野」、「膳部」が活躍していた可能性も指摘できる。

橋樹郡Ⅱ久良郡で雉を捕らえた「飛鳥部吉志五百国」は、橋樹郡の住人である。飛鳥部吉志は飛鳥部吉士と同じで、河内国の安宿郡に本拠地を持つ百済系の渡来系氏族である。吉士系の諸氏は倭王権から派遣されたミヤケ経営の専門的集団であり、橋樹郡の飛鳥部吉士もミヤケの実務に携わっていた可能性が高い。吉士系の諸氏は、倭王権の地方支配のために、各地のミヤケ周辺に入植させられたと思われる。さて、天平勝宝七年（七五五）の調庸布墨書銘に橋樹郡橋樹郷の住人として、「刑部直国当」の名前が記されている。刑部は允恭天皇の皇后である忍坂大中姫の名代とも、

敏達天皇の皇子である押坂大兄皇子の名代ともいう。東国では、伊勢・尾張・駿河・武蔵・下総・美濃・越前などに分布するが、全国的に分布するといつてよく、刑部直はこういった刑部の伴造氏族である。

さらに、『万葉集』巻二十には、天平年間に防人として徴発された橘樹郡の物部真根とその妻である椋椅部弟女の歌を載せている。物部は東国に広く分布したと思われるが、橘樹郡の物部の系統は不明である。椋椅部は崇峻天皇の椋椅宮にちなむ部民と考えられるが、武蔵・美濃・信濃・越前・丹後などのその分布が知られる。武蔵国では荏原郡・豊島郡にも分布が確認できる。

以上のように現在の横浜とその周辺では、祥瑞を手にして律令政府に報告した住民、防人の兵役を負担した農民とその妻、調庸布を作成・納入した農民、そして、彼らの祖先として、ミヤケで働く渡来系氏族、名代・子代の部や部曲の活躍を想定することができる。これだけでも横浜地域にとっては古代史を知る貴重な手掛かりであり、その存在を伝える意義は大きい。

### 三 地元の古代史の発掘〔考古資料の例示〕

地名・人名の分析で古代が見えてくる例をいくつか紹介したが、次にこの地域の遺跡についてふれてみよう。遺跡とそこから検出された出土品に注目すると、横浜にも古代史関連のものが数多く存在する。南部のものを中心にいくつかあげると次のごとくである。『光陵セミナー』では古墳時代を重視していたために古墳の例示が多くなっているが、これについては講座の内容によって、各時代に多寡

があつてよいだろう。

#### ① 縄文時代

杉田貝塚〔磯子区〕Ⅱ中期から晩期の集落跡で、その周囲を貝で丘陵状に造成している。

称名寺貝塚〔金沢区〕Ⅱ漁を生業とした中期から晩期の集落跡で房総との交易の痕跡がある。

#### ② 弥生時代

三殿台遺跡〔磯子区〕Ⅱ縄文・古墳時代へも継続する大集落跡で、二五〇棟の竪穴建物が切り合つて検出している。

大塚・歳勝土遺跡〔都筑区〕Ⅱ弥生時代中期の環濠集落と方形周溝墓群である墓地を同時に理解できる貴重な遺跡である。

#### ③ 古墳時代

東野台古墳群〔戸塚区〕Ⅱ二号墳は四世紀後半の全長五四メートルの前方後方墳である。

稲荷前古墳群〔青葉区〕Ⅱ一六号墳は四世紀後半の全長三八メートルの前方後方墳である。

殿ヶ谷古墳群〔南区〕Ⅱ一号墳は全長三〇メートルの四世紀後半ごろの前方後円墳である。

仏向町古墳〔保土ヶ谷区〕Ⅱ全長二三メートルの五世紀初めの円墳。帷子川水系では最古の古墳である。

朝光寺原古墳群〔青葉区〕Ⅱ一号墳は全長三七メートルで五世紀中ごろの円墳と考えられる。甲冑を出土したことで注目されている。

瀬戸ヶ谷古墳〔保土ヶ谷区〕Ⅱ墳丘を巡って円筒埴輪列、後円

部頂とその西側斜面に形象埴輪列をもつ六世紀中ごろの全長四メートルに及ぶ前方後円墳。

上矢部町富士山古墳〔戸塚区〕 周溝の際から六世紀中ごろの各種の埴輪が八〇個体以上も出土した円墳。全長は二九メートルに過ぎない。

室の木古墳〔磯子区〕 金銅装の豊富な馬具を副葬し、凝灰岩切石の横穴式石室をもつ六世紀末の円墳である。全長は三〇メートル。

軽井沢古墳〔西区〕 砂岩切石積の主体部を二基もつ六世紀末の前方後円墳。全長は二七メートルに過ぎない。

釜台古墳群〔保土ヶ谷区〕 帷子川左岸の丘陵上にあつた群集墳と思われる。

市ヶ尾横穴墓群〔青葉区〕 六世紀後半から百年間造営された集団墓地である。

浅間下横穴墓群〔西区〕 七世紀前半の横穴墓群である。江戸時代は浅間神社裏の観光名所となる。

猪久保西遺跡〔保土ヶ谷区〕 後期の竪穴住居跡が四棟検出された。集落の展開した可能性がある。

山下居留地遺跡〔中区〕 近代の外国人居留地の遺跡だが、この下層から後期の集落が発見されている。

#### ④ 奈良・平安時代

長者原遺跡〔青葉区〕 奈良時代から平安時代前期の大規模建物群であり、政庁地区と正倉地区が発見された。都筑郡衙跡であることが確実である。

神隠丸山遺跡〔港北区〕 大型の掘立柱建物群を一辺五三メー

トルの溝がめぐる一〇世紀前半の館跡が発見された。当時の「富豪浪人」の館であった可能性がある。

来迎寺西遺跡〔戸塚区〕 奈良時代から平安時代前期の住居跡八棟を検出。この時期の集落遺跡は貴重である。

後山田南遺跡〔戸塚区〕 横浜新道川上インターチェンジの北側にあつた平安時代の集落遺跡で、一〇世紀代の大型掘立柱建物が検出されている。

以上、古墳時代を中心に横浜の遺跡に注目すると、前期においては古墳の規模が小さく、前方後円墳が前方後円墳や円墳より先行する可能性が高い。中・後期も規模は小さいものの、瀬戸ヶ谷古墳・上矢部町富士山古墳の埴輪、朝光寺原一号墳の甲冑や室の木古墳の馬具、さらには軽井沢古墳の二つの主体部などは全国的にも注目されるといつてよい。また、横浜は六世紀末ごろから、横穴墓も盛んに造営される地域でもある。そして、奈良平安時代については、都筑郡衙跡が確認され、他にも「コ」字型の役所的機能をもちそうな掘立柱建物跡がいくつか確認できる状況である。

#### 四 横浜南部の地域史についての例示

この項では、筆者が財団法人かながわ考古古学財団に所属していた二〇〇四年に、スクールセミナーとして、横浜南部の横浜市立飯島中学校で『遺跡から見た栄・戸塚区の歴史』と題する講座を担当したが、この時の事例を踏まえて横浜南部の遺跡を補充しておきたい。舞台をこの地域に限定してみると、横浜北部を中心とした古代遺跡とは、やや趣を異にすることがある。

#### ① 縄文時代

細田遺跡〔戸塚区〕Ⅱ中期のまとまった集落である。裝飾性に富んだ土器が大量に出土した。現在は横浜桜陽高校である。

港南台遺跡群〔港南区〕Ⅱ細田遺跡と同様で、港南台駅の周辺に展開した大集落と思われる。

東正院遺跡〔鎌倉市〕Ⅱ数少ない晩期の集落遺跡で、注口土器が多量に発見されたことで注目される。

## ② 弥生時代

そとごう遺跡〔戸塚区〕Ⅱ柏尾川を望む丘陵上に、竪穴住居六

〇棟、方形周溝墓三基とそれらを囲む環濠をもつ集落が発見された。この遺跡の南東部の丘陵にも同時期の環濠集落である殿屋敷遺跡〔港南区〕が対抗勢力であるかのように存在する。

## ③ 古墳時代

東野台古墳群、上矢部町富士山古墳〔戸塚区〕Ⅱ前項参照。

七石山横穴墓群〔栄区〕Ⅱ本郷台駅の周辺に存在した横穴墓群である。鮎川の流域には多数の横穴墓群が爆発的に造られており、独特の様相を示している。

## ④ 奈良・平安時代

今小路西遺跡〔鎌倉市〕Ⅱ現在の栄区・戸塚区は鎌倉郡に属していたと考えられるが、この遺跡はその郡衙の跡である。「コ」字型に並んだ長大な掘立柱建物の柱穴から「天平五年」の文字のある木簡が出土している。

上郷深田遺跡〔栄区〕Ⅱ製鉄関連の遺構が発見され、鍛冶炉や工房跡、砂鉄が検出された竪穴建物が発見された。

上郷猿田遺跡〔栄区〕Ⅱ八世紀代の竪穴住居が一三棟検出され、大集落に発展する様相をもつ。

当地域の地名にも注目してみると、栄区の鎌倉街道沿いに「鍛冶ヶ谷」の地名が確認でき、上郷深田遺跡との関連が問題となる。また、同区の中央部には「公田」の地名が残り、このあたりが奈良・平安時代において公領であった可能性を語ってしよう。上郷猿田遺跡などの集落跡との関係もここから考えることができる。

## 五 神奈川の他地域についての例示

報告者はさらに県央部を歴史的舞台とする実践を行う機会に恵まれたが、それは二〇〇四年度に、座間高校で行った『遺跡から見た神奈川（座間）の古代』の実践である。前項のながわ考古学財団によるスクールセミナー事業の一つであり、ここで出会った遺跡についても、高校生に伝えたい身近な古代史を知る材料といえる。

### ① 先土器時代

栗原中丸遺跡〔座間市〕Ⅱ目久尻川の源流に近い段丘に所在し、先端が磨かれた石斧や多くの石器群が発見されている。現在は栗原高校である。

月見野遺跡群〔大和市〕Ⅱ目黒川流域には、多くの旧石器時代の遺跡が展開し、それぞれ石器群が検出されている。

### ② 縄文時代

上野遺跡〔大和市〕Ⅱここより隆起線文の土器が発見されているが、県内最古級の草創期の土器である。

新戸遺跡〔相模原市〕Ⅱ柄鏡式の敷石住居が見つかっていることと注目されている。形状の意味など不明なところ

が多い。現在の新磯高校である。

### ③ 弥生時代

本郷遺跡〔海老名市〕Ⅱ計画的に配置された墓地と住居群が発見されていて、環濠の一部も見つかっている。多様な人々の往来を想定させる土器群が検出されている。小銅鐸も発見された。

河原口坊中遺跡〔海老名市〕Ⅱここでも小銅鐸が発見された。

神崎遺跡〔綾瀬市〕Ⅱここより発見された土器の九割以上が東三河地方の技術で作られている。この地域からの集団移動を想定させる様相である。

### ④ 古墳時代

秋葉山古墳群〔海老名市〕Ⅱこのうちの三号墳は帆立貝式の前方後円墳で、出土した土師器などから県内でも最古級の三世紀後半の築造と考えられる。

上浜田七号墳〔海老名市〕Ⅱ秋葉山古墳群の南方に位置する前方後円墳で、四世紀後半の築造と考えられる。

登山古墳〔厚木市〕Ⅱ人物埴輪を出土した円墳で六世紀代のもので考えられる。

桜土手古墳群〔秦野市〕Ⅱ県内の後期古墳では保存がよい典型的な群集墳。内部構造に非在地的な要素がある。

登尾山古墳〔伊勢原市〕Ⅱ六世紀末ごろの小規模な円墳であるが、相模湾を見渡す丘陵に位置し、銅鏡・馬具・玉類などの優品を出土している。被葬者は相武国造家の関係者である可能性が高い。

浅間神社西側横穴墓群〔大和市〕Ⅱ馬具・鉄鏃・金環・玉類・須

惠器など豊富な副葬品を伴う横穴墓群で、七世紀後半ごろの造営と思われる。

### ⑤ 奈良・平安時代

相模国分寺・国分尼寺跡〔海老名市〕Ⅱ前者は法隆寺式の伽藍配置で、金堂・塔跡が検出され、規模も全国有数のものである。

下寺尾西方A遺跡〔茅ヶ崎市〕Ⅱ「コ」字型配置をもつ郡庁と正倉・館によつて構成される高座郡衙跡と考えられる。近郊に寺院跡や水辺の祭祀遺構も存在する。

この地域の地名にも注目すると、古代地名として「夷参」の駅家の存在が八世紀末に確認できる。これが一〇世紀前半には「伊参」の郷となり、その後「座間」に転訛していったと推定される。現在地名としては「国分」が国分寺との関連を、「高座」が高座郡との関係を伝えている。

### 六 受験の古代史と身近な古代史

ここでは受験生向きの授業で郷土資料を活用するために、教材に登場する神奈川の遺跡・史跡を確認してみたい。受験生といつても受験的な知識ばかりを望むわけではなく、さまざまな歴史的エピソードや歴史を好きになるきっかけとなるような話を期待していることも事実であるからである。なお、このテーマの場合は扱う地域を横浜に限定するのは困難であるし、有効ではないだろう。以下、県レベルの視野で見ておきたい。

#### ① 先土器時代

月見野遺跡〔大和市〕Ⅱ尖頭器、吉岡遺跡〔綾瀬市〕Ⅱ打製石

斧、箱根山〔箱根町〕 Ⅱ箱根系産黒曜石

## ②縄文時代

南堀貝塚〔横浜市〕、夏島貝塚・平坂貝塚〔横須賀市〕

## ③弥生時代

大塚・歳勝土遺跡、三殿台遺跡〔横浜市〕

## ④古墳時代

桜土手古墳群〔秦野市〕

## ⑤奈良・平安時代

長者原遺跡〔横浜市〕、相模国府関連遺跡〔平塚市〕、相模国分寺・国分尼寺跡〔海老名市〕、武蔵国府関連遺跡〔東京都府中市〕、

武蔵国分寺・国分尼寺跡〔東京都国分寺市〕。

以上のように、鎌倉・室町時代の鎌倉や幕末・明治時代以降の横浜以外でも神奈川の遺跡・史跡が代表的な日本史の舞台として取り扱われることもあるので、このあたりも、積極的に授業で活用し、受験生にも指摘しておくべきであろう。

また、神奈川ゆかりの著名な古代人も存在する。石上宅嗣・大伴家持・菅野真道・在原業平などは相模守の、源信は武蔵守の経験者として知られている。華嚴宗の僧である「良弁」が相模出身であるという説もある。これらは多くの受験生におなじみの人物であろう。さらに、藤原頼通の時代の歌合せで活躍し、大江公資の妻であった「相模」にも注目できる。百人一首に登場する女流歌人として、この当時の国司の妻の一例として貴重な存在である。かかる事実も活用の余地がある。

以上、地域の古代史を知るための資料は不十分な状態であるケースが多いと思われるが、それでも当該の資料の考察を深めることで、地域の古代史を認識することは可能である。認識後はできる限り、その縁の地を訪れるフィールドワークの実施を考えるべきであろう。その際に、各地域の遺跡地図に見える古代遺跡を見つけ出し、指摘することも有効と思われる。かかる機会を何回か得ることができれば、学校周辺の古代史、自宅周辺の古代史などがいつの間にか語れるようになるはずである。

## 〈参考文献〉

- 村田文夫『古代の南武蔵―多摩川流域の考古学』、有隣堂、一九九三年
- 神奈川県考古学会編『かながわ遺跡めぐり』、多摩川新聞社、一九九九年
- 横浜市歴史博物館編『企画展 横浜の古墳と副葬品』、財団法人横浜
- 市ふるさと歴史財団、二〇〇一年
- 財団法人かながわ考古学財団編『スクールセミナー 遺跡から見た栄・戸塚区の歴史』、二〇〇四年
- 財団法人かながわ考古学財団編『スクールセミナー 遺跡から見た神奈川（座間）の古代』、二〇〇四年
- 坂本彰『鶴見川流域の考古学』、百水社、二〇〇五年
- 須藤智夫『古墳時代後期における南武蔵の一樣相―古墳・横穴墓と氏族の動向―』、『神奈川考古』四三、二〇〇七年
- \*各遺跡の発掘調査報告書・各地方公共団体の自治体史については省略させていただいた。

## 七 むすびにかえて